
貧乏神はオレンジ色

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏神はオレンジ色

【Nコード】

N6721X

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

私が拾った神様は、貧乏神でした。

オレンジ色

その日私は、神様を拾いました。

寒いを通り越して、冷たくなってきたような気がする。私は身震いすると、カーディガンを羽織りなおした。

十月は、町中オレンジ色になる。訂正、町中カボチャだらけになる。煌々（こうこう）と光るカボチャのランタンは、可愛い半面不気味だった。

カボチャで飾られた雑貨屋を通り過ぎて、スーパーへと向かう。今日は金曜日だ。食料を買い込んでおけば、土日はずっと家で過ごせる。私は値引きシールの貼られた商品を次々とカゴに入れると、レジへと向かった。途中、お菓子コーナーで発見したロリポップの大袋を、カゴの中に放り込む。別に飴が好きだというわけではなかったが、なんとなく甘いものが食べたかった。

仕事帰りはどうしても、甘いものが食べたくなるのだ。

人付き合いが苦手だからと選んだ事務職だけれど、もちろん事務職にだって人間関係はついて回る。職場の人との関係だとか、取引先との電話だとか。他人と話すことすら苦手な私は、事務職といえど苦痛だった。けれど転職する勇気もなく、大学を卒業してから三年間、同じ所に勤め続けている。

幸い、仕事場の人は私に興味がないらしい。私が一切無駄話をしなくても、それに関して突っ込んでくる人間はいなかった。

スーパーから出ると、冷たい夜風が頬に刺さった。もう冬も近い

んだな、と思いながら自宅への道を歩く。道中、何の変哲もない電柱に、人が群がっているのが見えた。皆で電柱を囲い、下を向いている。携帯で写真を撮っている人までいた。

「……？」

自宅に帰るためには絶対に通る道なので、私は警戒しながらも近づいた。皆一様に、笑っているような、馬鹿にしているような、そんな顔をしている。嘲笑。私の一番嫌いな顔と声だ。

人だかりの近くまで来ると、皆が何を見ていたのかが分かった。

電柱の陰に、女の子が座り込んでいたのだ。

五歳くらいだろうか。膝を抱えて座っているその子は、とても小さく見えた。猫背で、膝に顔をうずめている。オレンジ色の服を着ているせいで、カボチャのように見えなくもなかった。

迷子だろうか。だとしたらなんで皆、ただ笑って見ているだけなのだろう。

人と関わりたくない私は、女の子の姿を横目で確認しながらも通り過ぎた。若い男が何かを言って、そのあと笑う声が聞こえてきた。……楽しそうな笑い声、ではなかった。

ああ、と思う。私は立ち止まって、後ろを振り返った。

彼女は、昔の私に似てるんだ。

皆から囲まれて、笑われて、でも何も言えなかった。

自分を守るように、猫背で身を丸めて、震えて。

私は早足で引き返した。スーパーの袋が必要以上にガサガサと音をたてる。私は人だかりの隙間を無言でぐりぬけると、女の子のもとへと向かった。皆、眼を丸くしてこちらを見ているが、そんなのはもうどうでもよかった。どうせ、私に興味のある人もいないだ

ろっ。

近くに来てみると、女の子は本当に小さかった。少し茶色がかった黒髪は長さばらばらで、切り損ねたおかつぱ頭のようにだった。

「……どうしたの？ 道に迷ったの？」

なるべく優しく訊くはずだったのに、低く唸るような声が出た。

私は咳払いをして、「お母さんとお父さんは？」と高めの声で訊き直した。人だかりが先ほどよりもざわついているのが分かる。背中に変な汗をかきながら、私は女の子を覗き込んだ。

彼女は少しだけ顔をあげて、私の方に眼を向けた。睫毛まつげが濡れているのを見て、泣いていたのだと気付く。

「自分のお家うち、どこだかわかる？ お名前は？」

何を聞いても、女の子は黙ったままだ。そんな彼女を代弁するかのように、誰かが呟いた。

「そいつに、家なんてあるわけねーじゃん」

先ほどと同じ、馬鹿にしたような笑い声が続く。私は内心むっとしながら、彼女の方に手を伸ばした。頭に触れると、彼女の身体が一瞬だけ大きく震えた。

「……お家がどこにあるのかわからないなら、おまわりさんに訊きに行こうよ。お姉ちゃんも一緒に行くから」

私がそういうと、彼女は膝に顔をうずめたまま、かすかに首を振った。自分の家が嫌なのか、交番が嫌いなのか。どうしたものかと考える私の上を、冷たい空気が通り過ぎた。とにかく、ここは寒い。なのに彼女の恰好は、オレンジ色のワンピース姿だった。夏に向日葵でも持っていそうなその恰好は、この季節にはそぐわない。

「……私の、お姉ちゃんの家に来る？」

このままでは風邪をひいてしまうと思った私が提案すると、彼女

はようやく顔をあげた。ただでさえ大きな目を、さらに大きく見開いて私の方を見ている。眼を見開いているのは取り巻きの人たちも同じで、「信じられない」と言わんばかりの顔をしていた。

もちろん、誘拐するつもりはなかった。今日だけでも私の家に泊めて、翌朝交番に連れて行けばいい。彼女の様子を見る限り、このままだとテコでも動きそうになかった。

私は先ほど買ったばかりのロリポップを一本取り出すと、彼女に差し出した。

私はいま、うまく笑えているだろうか。

彼女は恐る恐る飴へと手を伸ばしてきた。「行こっか?」と言うと、彼女は口を固く結んだまま、ゆっくりと頷いた。

「あいつ、貧乏神を拾っちゃったよ」

そんな声が、どこからともなく、聞こえた。

視認できる神様

それからずっと、女の子は無言だった。私が何を聞いても、返事をしようとしなない。下を向いて、私があげたロリポップを両手で握り締めている。彼女にあげたロリポップは偶然にもオレンジ味で、オレンジ色の彼女の服と妙に合っていた。

立ちあがった彼女の身長は、メートルあるかないかだ。やはり五歳くらいだろうか。大きな目と低い鼻が特徴的だけれど、特別可愛いわけでもない、嫌な言い方をすればどこにでもいそうな女の子だった。

彼女と一緒に歩いていると、道行く人にじろじろと見られた。私が見られないだけで、彼女はこころ辺では有名な子供なのかもしれない。誰かに尋ねてみようと思ったものの、その好奇心な目を見て思いとどまった。その目は明らかに彼女のことを心配しているのではなく、ただ面白がっているだけのようだったから。

私の住んでいるワンルームマンションは、一人暮らしにしては少し広く、けれど家賃が安いお手頃物件だった。駅から多少離れていても文句のない私は、この物件を見て即決した。地元では『幽霊マンション』なんてあだ名があるくらい、老朽化の進んでいるマンションではあったけれど。

自分はさっさと部屋に上がってから、彼女が玄関から動いていないことに気付く。見ると、彼女はロリポップを強く握りしめたまま俯いていた。わずかに肩が震えていて、けれど彼女は何も言わない。「…………お家に帰りたくなかった？」

思い当ることを聞いてみたものの、彼女はわずかに首を振るだけ

で、口は固く結んだままだ。もしかしたらこの子は話せないのかもしれないと、私はここでようやく気付いた。

「お姉ちゃんの家、入るの嫌？」

訊いてみると、彼女は逡巡してから首を振った。

「じゃあ、遠慮なくどうぞー。一緒にお菓子食べよ？」

私はなるべく彼女が喋らなくても答えられるような言葉を選んで、口にした。彼女は少しだけ顔をあげて、上目遣いに私の顔を見るとゆっくりと靴を脱ぎはじめた。その靴もオレンジ色で、ハロウィンみたいだなと私は笑った。

彼女が話せない（文字も書けなかった）ので、彼女の名前は分からなかったし、どこから来たのかも、どうしてあそこにしゃがみこんでいたのかも分からなかった。年齢なら指で表せるだろうと思っ
て訊いてみたものの、彼女は首を傾げるだけで、それすら分からない。

私は彼女にお菓子を食べさせながら、携帯でこっそりと『貧乏神』を検索してみた。彼女に話しかけていた時に聞こえてきた、「貧乏神」という言葉が気になったからだ。普段、新聞どこるかテレビすらろくに見ない私は、世間にひどく疎かった。

貧乏神で検索してみると、相当数がヒットした。その内の一つのサイト名を見て、私はギョツとする。

『オレンジ色の貧乏神』

……都市伝説の類ではなかるうか。内心で疑いつつも、私はそのサイトを開いた。

『神様、という存在は日本各地に存在する。その中でも異質なのがこの、「オレンジ色の貧乏神」である。一般的な神様は、人間には姿が見えない。なのにこの貧乏神だけは、人間にも視認できる唯一の神様なのである。落ちこぼれの神様と言っても過言ではないだろう』

落ちこぼれ……。嫌いな単語を見て、私は眉間にしわを寄せながらも続きを黙読する。

『考えてもみてほしい。幸福の神様ならば、人間は喜んでその手を取るだろう。けれどもそれが貧乏神だったなら、どうだろうか。貧乏（不幸）になると分かっているのに、その手を取るだろうか。

そう、貧乏神は、本来ならば一番姿を見られてはいけない神様なのである。

視認できる存在故、その姿を収めた写真がある。次のページに載せておく。彼女と会った際は気をつけてほしい。付きまとわれたら、あなたは確実に不幸になる』

私は目の前でマカダミアチョコを食べている彼女を一瞥してから、次のページを開いた。そして、凝り固まった。

そこに載っていたのは間違いなく、いま私の目の前にいる彼女の姿だった。

『オレンジ色の貧乏神は、容姿は五歳ほどの子供である。いつでもオレンジ色のワンピースに、同色のスリッポンを履いている。見た

目こそ可愛いが、絶対に家にあげてはならない。万が一あなたの家
にこの貧乏神が居座ったら、あなたの家はたちまち不幸になるだろ
う。」

私はそこまで読むと携帯を閉じて、彼女に目をやった。彼女は口
の端にチヨコレートをつけながら、マカダミアチヨコをぼりぼりと
食べ続けている。私があげたオレンジのロリポップは、大切そうに
左手に握ったままだった。

今見たサイトの信憑性は分からない。けれど、帰る場所のなさそ
うな彼女の様子を見る限り、これは本当のことなのかもしれない、
と思った。

十円玉

彼女が相変わらず話そうとしないので、私は「肯定の時は頷く」「否定の時は首を横に振る」というジェスチャーを覚えさせて、彼女と会話した。

まず、帰る家があるのかどうかを確認した。彼女は気まずそうに首を横に振る。……やっぱりあなたは貧乏神なの？ とはさすがに訊けないので、その質問は飛ばして、「私の家うちと一緒に住む？」と訊いてみた。すると、さきほどまで無表情だった彼女が、眼を見開いた。

「外、寒いでしょ？ ここでお姉ちゃんと一緒に住む？」

彼女は何かを言おうと口を開いて、けれども何も言わずに下を向いた。手に持っているロリポップをくるくると回している。私はその様子を見ながら、昔の自分を思い出していた。

多分私は、目の前の彼女に、昔の自分を重ねて見ている。
だから、放っておけないんだ。

「……遠慮しなくていいんだよ。お姉ちゃんといるのが嫌になったら、お外に行ってくれてもいいし。お姉ちゃん、ここで一人で暮らしてるんだ。一緒にいてくれたら、寂しくなくていいなって思ったんだけど」

彼女はロリポップを回していた手を止めると、私の顔を遠慮がちに覗き込んできた。きゅつと結んだ口がへの字になっていて、泣きそうなのだと分かる。私はそれに気付かないふりをして、笑った。
「一緒にいてくれる？」

私が尋ねると、彼女はお辞儀するみたいに頭を深く下げて、頷いた。

彼女には、名前がなかった。さすがに「オレンジ色の貧乏神」とは呼べないので、私は彼女のことを「みかん」と呼ぶことにした。食べ物の名前をつけるのもどうかと思ったが、彼女はその名前を聞いて満足そうに頷いた。

声を出さないみかんに名前を呼ばれることはないだろうと思いつつ、私は「都子^{みやこ}」という自分の名前も教えておいた。

神様は食べる必要も寝る必要もない。なんとなくそう思い込んでいたけれど、みかんはお菓子が好きだったし、夜はぐっすり眠っていた。

替えの服がないのが気になって彼女に尋ねてみたけれど、みかんは外に出たくないと言った。私は彼女の好きな色を聞いて、一人で子供用の服を買に行った。彼女が好きなのはやっぱりというかオレンジ色で、私はオレンジ色の秋服と冬服をディスカウントストアで購入した。ついでに、ロリポップも買い込む。みかんが特に好きなのが、このロリポップだったからだ。

日曜の夜、私はみかんに、オレンジ色の紐のついた合い鍵を渡した。

「お姉ちゃん、明日からお仕事に行くけど、お外に出たくなかった時は、ちゃんと鍵をかけて行ってね。鍵はなくさないように、首から下げておくんだよー」

私は合い鍵を彼女の首にかけた。彼女は相変わらず表情をあまり変えないけれど、どことなく嬉しそうに、その鍵を握りしめていた。

私の生活が劇的に変わりだしたのは、それから二日後のことだった。

まず、仕事を解雇された。それも唐突にだ。大した貯金もなく、いきなりニートになった私は慌てて就職活動をした。けれど、不景気のせいもあってどこも受け入れてくれない。やっとのことで清掃員のバイトに就けたものの、労働時間は短いうえに時給も安くて、生活はたちまち逼迫ひっばくした。食品は見切り品ばかり買うようになったし、お菓子なんて買えないくらいに余裕がなくなつた。食卓には、もやし料理が頻繁に並ぶようになった。ただ、みかんの好きな飴だけは、買うようにしていたけれど。

オレンジ色の貧乏神、と言う言葉が頭をよぎる。けれど私は首を振った。みかんのせいかどうかは分からないし、彼女のせいにはしない。

人間を酷く怖がっている彼女を追い出したくなかつた。

そして、一人ぼっちになるのは、寂しかった。

働く時間が減つた分、私はみかんと家で遊ぶことが多くなつた。高価なおもちゃを買ってあげることができないので、百円均一の店で買った安っぽいおもちゃで仲良く遊んだ。彼女は相変わらず話さないし、外に出るのもこわがるけれど、少しだけ笑うようになった。

もう、それだけでよかった。彼女が少しでも笑ってくれれば、それで。

ところがある日、私が仕事から帰ってみると、みかんは泥だらけで玄関に座り込んでいた。彼女のその姿を一目見ただけで、外に出ただと分かった。

「みかん？ どうしたの？」

私が声をかけると、彼女は私に右手を差し出してきた。小さくて柔らかそうな手のひらに、十円玉が一枚だけ乗っている。私はそれを見て、首をかしげた。

「拾ったの？」

尋ねると、彼女は無言でうなずいた。私の方に十円玉を差し出したまま動かないみかんを見て、私は苦笑した。もしかして、
「……これ、くれるの？」

無言で頷くみかんには、焦燥感というか、悲壮感というか、そういうものがあつた。

私は膝をついてみかんと同じ目の高さになると、そのまま彼女を抱きしめた。

「ありがとうね」

私の腕の中で、彼女のか身体がこわばれるのが、分かった。

みかんは私が仕事に行っている間、外出するようになった。いつも泥だらけで、十円玉や五円玉を握りしめて帰ってくる。痣だらけで帰ってくることもあって、私は酷く不安になった。

「目に見える貧乏神」なんて、いじめの標的になりかねない。もしかしたら外で、酷い目にあっているのではないか。

けれどみかんは、外に出るのをやめなかった。「私も一緒に行こ

うか」と提案したものの、彼女は嫌がった。

その日も泥だらけで帰ってきたみかんは、何故か酷く緊張しているように見えた。こわばった顔のまま、握りしめている十円玉をいつものように差し出してくる。私がお礼を言ってそれを受け取ると、彼女は私の手をきゅっと握りしめてきた。

みかんが私に触れようとするのはこれが初めてだったので、驚いた。

しっとりしていて妙に熱い彼女の手は、少しだけ震えていて。

「……………ん？」

私が笑いかけると、彼女は思いつめた表情のまま、ゆっくりと口を開いた。

少し鼻の詰まったような、けれど聞き取りやすい高い声。
みかんはわたしの方を見ながら、はっきりとこう言った。

「みゃーこちゃんは、しゃーわせになるの」

雨

みかんが喋るようになった。

と言つても口数は少ないし、私の名前、「みやこ」は「みゃーこ」に、「しあわせ」は「しゃーわせ」になっていたけれど。

彼女は口癖のように、「みゃーこちゃんはしゃーわせになるの」と言い続けた。それを言う時は、いつも私の手を握ってくる。その姿は何故かとても必死で、どこか痛々しかった。

雨が降っていても毎日外に出て、十円玉を探しに行くようにもなっていた。

みかんは、私の生活くちを酷く気にしていた。

明らかに余裕がないし、はつきり言ってしまうえば貧乏生活だったからだ。

「ね、みかん。みやこちゃんはさ、お金がなくても大丈夫なんだよ？」

みかんが私のことを『みゃーこちゃん』と呼ぶようになってから、私は自分のことを『みやこちゃん』と呼ぶようになっていた。ただしそれは、みかんと話すとき限定だけだ。

近頃の彼女は何かに追い詰められているようで、それに耐えきれなくなつた私は声をかけた。けれどみかんは口をつぐんだまま、首を横に振るばかりだ。そして、

「……みゃーこちゃんは、しゃーわせになるの」

俯いたままそう言うと、トイレの中に逃げ込んでしまった。

私がかんのことを追い詰めているんじゃないか、と思う時がある。

彼女にとって、私といることはいいことなのかどうなのか。

切羽詰まった感じのみかんを見るたびに、私は不安になった。

みかんと一緒に暮らしたいのは、あくまでも私のわがままでしかなくて、みかんが本当にそう思ってくれているかどうかは分からないのだ。

みかんと最初にあった日のことを思い出す。

もう二度と、彼女にあんな顔をさせたくなかった。

けれど今のこの状況は、彼女にとって快適なものではない。

私は机に突っ伏して、トイレにいる彼女には聞こえないよう声を押し殺して、泣いた。

みかんとは楽しく話せているものの、私も元来人付き合いが苦手だった。バイト先でも必要最低限の言葉しか話さないで、仕事仲間と親しくなることもない。

子供のころから、人と話したり遊んだりするのが苦手だった。高校生になる頃には、『もうずっと独りでいいや』とすら思っていた。しんどい思いをしてまで人と付き合うのなら、一人で生きていく方が気楽だ、と。

でも寂しかったんだ、本当は。

自分で選んだくせに、孤独が怖かった。

だからきつと、みかんにしがみついているのは私の方なんだ。

例え彼女が、貧乏神であったとしても。

その日は朝から土砂降りで、午前中のみのお勤だった私は、「今日は外に出ないように」とみかんに念を押して言った。みかんは雨の日でも傘をさそうとしない。カッパも着ようとするので、雨の日は家にいるようにいつも口を酸っぱくして言い聞かせていた。みかんはしぶしぶ頷くと、おもちゃで遊び始めた。私は彼女の横にロリポップを置いてから「行ってくるね」と声をかけ、外に出た。みかんの小さな後ろ姿が、目に焼き付いていた。

「ちょっと。ここ、まだ汚れてるわよ」

「あ、すみません」

「こっちも。ちょっと来て」

「……すみません」

その日、私は仕事中にミスを繰り返した。
何故かその日は、やけに不安だったのだ。

帰宅した時にはもう、みかんがいなくなっているような気がした。
おもちゃで遊ぶ後姿が、彼女の最後の姿になるような気がして、
怖かった。

仕事が終わると、私は足早に家に帰った。どうか予感が外れてい
ますようにと思いつながら、そつとドアを開ける。

みかんは、私に背を向けて床にぺたりと座りこんでいた。
朝見た時と同じ体勢で、おもちゃで遊んでいる。

その姿を見てほっとした私は、足音をたてないようにゆっくりと
彼女に近づいた。彼女は、私が帰ってきていることに気付いていな
い。ゾウとキリンの人形を両手に持って、動かしている。その様子
は本当に普通の子供みたくで、思わず眼を細めた。

私は後ろからいきなり彼女に抱きつくこと「ただいまー！」と笑い
かけた。驚いた彼女の身体がきゅっと硬くなって、それから震え始
める。

「…………みかん？」
異変に気付いた私は、彼女の顔を覗き込んだ。

みかんは声も出さずに、大きな目からぼろぼろと涙をこぼしてい
た。

女の人

わたしは、おちこぼれの神さまです。

人間ひとにすがたを見られてはいけないのに、わたしの体すがたは人間にも見えてしまうのです。なぜそうなったのかは分かりません。生まれるときから、そうでした。

わたしは『びんぼうがみ』です。わたしとかかわった人間は、びんぼうになってしまいます。わたしが、そうなってほしいと願っているわけでもありません。なのに、わたしにかかわった人は次々とびんぼうになって、そしてわたしを捨てていきました。

当然のことだと思えます。だって、わたしにかかわったら不幸になってしまうんだから。

わたしのウワサはどんどん広まっていきました。目に見えるびんぼうがみなんて、かんげいされるはずがありません。

みんなでわたしのことを指差してわらったり、……こわい人だとわたしをなぐったり、けつたりしました。

「貧乏神なんて存在するから、人間は不幸になるんだ」と、ずっと言われつづけてきました。

そのうちわたしは、話せなくなってしまいました。

声はでるのに、人間の前で話すのが、とてもとてもこわいのです。

わたしが話すとバカにしたように笑ったり、おこつたりする人も多くて、それがこわくて、わたしは声をだすのをやめました。

そして、ものかげにかくれて、くらすようになりました。
だれかに見つけられると、すぐにいじめられてしまいます。
だからわたしはいつも、たいようの光もあたらぬような場所で、
だれにも見つからないようにじっとしていました。
それでも人間に見つかってしまふときがあります。そんなときは
いっばいなくられたり、笑われたりしました。

あの日もわたしは人間に見つかってしまつて、逃げているところ
でした。

けれどどこに行つても、わたしが存在いてもいい場所は見つかりませ
ん。

わたしは道ばたに座ると、だれにも見えないように顔をかくして、
泣いてしまいました。そのあいだもずっと、みんなの笑う声がきこ
えてきます。それは、とてもこわくて、さみしくて。

「……どうしたの？ 道に迷つたの？」

やさしい女の人の声がふつてきたのは、そんなときでした。「お
母さんとお父さんは？」という声に、泣きやんだわたしはようやく
顔をあげました。

そこにいたのは、ふわふわのかみの毛がよく似合っている、女の
人でした。顔が少しだけ赤くなつていて、この人もきんちようして
いるんだと、わかりました。

神さまには、お父さんもお母さんもいません。わたしがだまつていると、

「自分のお家、どこだかわかる？ お名前は？」

女の人はこまっただように、そう聞いてきました。声をだすのがこわくてだまつていると、女の人はわたしの頭をなでました。

だれかにやさしくしてもらえるのは本当にひさしぶりで、わたしは泣き出しそうになるのをこらえました。

「……お家がどこにあるのか分からないなら、おまわりさんに訊きに行こうよ。お姉ちゃんも一緒に行くから」

女の人はそういつてくれたけど、わたしに家なんてありません。わたしが首をふるると、女の人はしばらくしてから、

「……私の、お姉ちゃんの家に来る？」
そう言いました。

わたしはびっくりして、女の人の顔を見ました。ふわふわしたかみと、ふわふわした笑顔が、そこにはありました。

この人は、わたしの貧乏神を知らないんだ。

どうすればいいのかわからなくて、わたしがだまつていると、女の人はスーパーの袋から棒のついたあめをとりだして、わたしにくれました。

何かをもらうのもひさしぶりで、わたしはどきどきしながらそれをもらいました。

「行こっか？」

女の人がやさしい声でそういって、わたしは思わずうなずきまし

た。

その人の家にわたしが行ったら、どうなるかは、わかってました。

「あいつ、貧乏神を拾っちゃったよ」

そんな声が、どこからともなく、聞こえてきました。

いつしょ

「お名前、言える？」

女の人にそう言われたものの、わたしはこたえることができませ
ん。わたしには名前がないし、話すのはどうしてもこわかったから
です。

わたしは女の人にもらったオレンジ味のあめを、落とさないよう
にしつかりと持ちました。

ただのあめでも、わたしにとってはタカラモノでした。

女の人と歩いていると、とおりすぎていく人たちにじろじろと見
られてしまいました。きつとみんな、わたしがびんぼうがみだとい
うことを知っているんだと思います。この女の人はまだ知らないみ
たいけど、わたしのしょうたいを知ったらきつと、さよならって
言われるだろうなと思いました。

女の人のお家^{うち}は、おばけのでそうなマンションでした。神さまが
「おばけがでそう」というのは変かも知れませんが、ひびわれてい
る力べや、よごれている階段の手すりは、「おばけがでそう」とい
う言葉がびつたりでした。

女の方は自分の家のドアをあけると、さつさと中にはいつてしま
いました。わたしは、どうすればいいのかわからなくて、困りまし
た。わたしがこの人の家にはいっただけで、この人は不幸になるか
もしれません。いいえ、わたしに話しかけてしまったこの人は、
もう不幸なのかもしれません。わたしはあめをにぎりしめたまま、

げんかんに立ちつくしました。

女の方がこちらをみて、「……お家に帰りたくなつた？」ときいてきました。首をふつたものの、どうすればいいのかわかりません。「お姉ちゃんの家、入るの嫌？」

わたしは首をよこにふりました。

ほんとうは、一日だけでもいいからこの人に、そばにいてほしいと思っていました。

一日だけでも、だれかに優しくしてほしかった。

「じゃあ、遠慮なくどうぞー。一緒にお菓子食べよ？」

女の方はにっこりと笑うと、右手で「おいでおいで」をしました。わたしはオレンジ色のくつをぬぐと、家の中にはいました。

だれかの家にいれてもらえるなんて、もう二どとないんだと思っていました。

女の人の家は、きれいに片づいていました。本だなには、本がたくさんならんでいます。ベッドは水玉もようで、うすい青色でした。小さなテレビがへやのすみにポツンと座っていて、四角くて黒い顔がこちらをじっと見ているようでした。

女の方はわたしをいすに座らせると、スーパーの袋からお菓子をとりだして、お皿にならべました。それから、そのお皿をわたしの前におきました。

お皿には、チョコレートや、クッキーや、キャラメルがのっていました。

わたしがお菓子をたべている間、女の人はずっと下を向いていました。きつと、ケイタイでわたしのことをしらべているんだろぅなと思ひながら、わたしはチョコレートをとべました。

女の人がすこしだけこわい顔をしたので、もうすぐサヨナラしなきやいけなひんだとわかりました。わたしのしょうたいがバレてしまつたんだ、と。

わたしはチョコレートをたべながら、女の人にもらつたあめを見つめました。わたしの好きなオレンジ色で、食べるのがもつたいないなと思ひました。

だけでもう、出ていかなくちや。

このオレンジ色のあめを見ているだけで、わたしは泣いてしまひそうなくらいしあわせでした。

声をかけてくれて、頭をなでてくれた。

それだけで、十分でした。

この人をまきこんでしまふ前に、はやく出ていった方がいい。

わたしはせめて、だしてくれたお菓子だけでもたべていこうと、チョコレートを口いっばいにほおばりました。

なのに、女の方はふんわりと笑つて、こういひました。

「私の家うちと一緒に住む？」

わたしといたら、お姉ちゃんは不幸になるよ。

それがどうしても言えなくて、黙ってしまった私に、女の人はいいました。

「一緒にいてくれる？」

だれかといっしょにいたかったのは、わたしの方でした。

コトダマ

女の人の名前は、「みやこ」ちゃんというそうです。

みやこちゃんはわたしのことを、「みかん」と呼ぶようになりました。

みやこちゃんは私のために、子供用の服を買ってくれたり、お菓子を買ってくれたりしました。わたしは、オレンジ味の棒付きあめが好きです。

それは、最初にみやこちゃんがくれたお菓子だったからでした。

今はそうやってお菓子を買うようがなくても、そのうちみやこちゃんもびんぼうになってしまふだろう。私はそんなことを思いながら、けれど何もいえずに、みやこちゃんのお家に住みついています。お家のカギも、もらいました。カギには、わたしの好きなオレンジ色のヒモがついていました。

みやこちゃんは、あつという間に貧乏ひんぱんになりました。

お仕事をさがして、がんばってはたらいで、なのに生活はちつとも楽になりません。みやこちゃんは節約するために、もやしの料理ばかり作ってみたり、ねびきシールがはられる時間を見はからってスーパーに行ったり、ベランダで家庭菜園かてーさいえんをしてみたりと、あれこれためていました。だけど、なにをしても結果はいつしよなのです。

わたしが、この家にいるかぎりは。

普通なら、とっくに「出ていけ」と言われているはずですよ。
なのに、みやこちゃんは何も言いません。
お仕事がおやすみの日は、わたしといっしょに遊んでくれるよう
になりました。

みやこちゃんはとてもいい人で、だから、幸せになってほしいと
思いました。

わたしは、みやこちゃんがお仕事に行っている時にこっそりと外
に出て、自動販売機のしたに、お金が落ちていないか探しまわりま
した。すこしでも、みやこちゃんの生活を楽にしたいと思ったから
です。でも、びんぼうがみのわたしがお金を探したって、見つかる
はずがありません。見つけられるのはせいぜい十円玉でいどでした。
お金を探す私に、石を投げてくる人もいました。

みやこちゃんに十円をあげたって、なんの役にも立たないことは
分かっていました。けれどみやこちゃんは、ありがとうといって、
わたしをだきしめてくれました。

みやこちゃんに幸せになってほしい。
ここから、そう思いました。

神さまは、「コトダマ」というチカラを持っています。

自分の言った願いを、本当にするチカラです。

びんぼうがみのわたしも、いちおう神さまなので、「コトダマ」をつかうことができます。

ただ、コトダマをつかうには、いくつかのじょうけんがあります。

まず、自分自身に対して、コトダマのチカラをつかうことはできません。

つまり、「わたしはびんぼうがみじゃなくなる」と言っても、その願いは叶いません。

コトダマは、自分じゃないだれかのためにつかうチカラなのです。

さらに、コトダマをつかうときは、その「だれか」の体にさわりながら、願い事をいわなければなりません。

びんぼうがみのわたしに、さわってくれる人なんて、……さわらせてくれる人なんて、今までだれもいませんでした。

だからわたしは、コトダマをつかったことはありません。

けれど、みやこちゃんは、わたしの頭をなでてくれました。

だきしめてくれました。

みやこちゃんには、幸せになってほしいと、思いました。

声を出すのは本当に久しぶりで、わたしはきんちょうしています

た。わたしはその日拾った十円玉をみやこちゃんに差し出して、それを受け取るうとするみやこちゃんの手をすばやく握りしめました。みやこちゃんはやっぱり、いやがりませんでした。

「……ん？」

わたしにむかって笑うみやこちゃんは、とてもきれいでした。

だれかの体にふれて、だれかのためにお願い事をいう。そうすれば、コトダマは成立する。

お願い事は、決まっています。

わたしはできるだけはつきりと、その言葉を口にしました。

「みやこちゃんは、しゃーわせになるの」

なんども、なんども。

わたしはそのコトバを繰り返しました。

けれど、みやこちゃん的生活は、なんにも変わりません。

お金はどんどんなくなつて、それでもみやこちゃんはわたしに「出ていけ」とは言いません。

みやこちゃんは、幸せになりませんでした。わたしは、コトダマをつかえませんでした。

わたしは、できそくないの神さまでした。

あつたかい

みやこちゃんのお家を出ていく勇氣もないわたしには、十円玉や五円玉を探すことしかできませんでした。

「みゃーこちゃんは、しゃーわせになるの」

何度くりかえしたって、みやこちゃんが幸せになることはありません。

わたしのコトバはコトダマではなくて、ただの口ぐせになってしまいました。

みやこちゃんは、食べ物を買えないくらいびんぼうになってしまったとしても、わたし追い出すことはしないのかもしれない。そう思いはじめていました。

みやこちゃんは少しずつやせてきていて、それでもわたしのためにあめを買ってきてくれます。

自分が情けなくて、しかたありませんでした。

ただでさえ迷惑なびんぼうがみなのに、コトダマすらつかえないなんて。

わたしは神さまでも何でもなくて、めいわくばっかりかけるただの他人ことどもなんだ。

このお家から出ていかなきゃいけないのに。

じゃなきゃ、みやこちゃんは幸せになれないのに。

なのに、一人ぼっちになるのが怖くて仕方ありませんでした。

「ね、みかん。みやこちゃんはさ、お金がなくても大丈夫なんだよ？」
遊んでいるわたしの後ろから、みやこちゃんは優しい声でそう言ってきました。

大丈夫じゃない。

みやこちゃんは、大丈夫じゃないのに。

わたしは首をふる、「……みやこちゃんは、しゃーわせになるの」と呟きました。みやこちゃんの手も握らずに言ったそれは、ただのヒトリゴトでした。

わたしはみやこちゃんの顔が見れなくて、見るのがこわくて、トイレの中に閉じこもりました。

むねの中に何かがつつかえてるみたいで、けれどそれが何なのかは分かりません。

わたしはひんやりとした床の上に座って、いろんなことを考えました。

わたしがちゃんとコトダマをつかえたら、今頃みやこちゃんはどうな生活をしていたんだろう、とか。

わたしがびんぼうがみじゃなくて、せめて普通の人間だったら、とか。

みやこちゃんとわたしは会わないほうがよかったんじゃないか、とか。

何度言っても叶わないお願い事みたいに、何度考えても変えられないことばかりでした。

みやこちゃんと最初にあった日のことを思い出しました。

あの時ふんわりと笑ったみやこちゃんは、いまでもふんわりと笑っていて。

けれど今は、無理して笑っているのかもしれない。

わたしの、ために。

ざあざあふってる雨を見ながら、わたしは外に出ることを考えていました。

それは十円玉をさがしに行くためでは、なくて。

「みかん。今日は雨も降ってるし、外に出ちゃダメだよ」

わたしの考えていたことを知ってか知らずか、みやこちゃんがそんなことを言いました。雨の日は外に出ないように、とはいっても言われているけれど、この日のみやこちゃんはすごくしんけんな顔をしていました。そんな顔を見て、何も言えなくなってしまうわたしは素直にうなずくと、みやこちゃんが買ってくれたおもちゃで遊びはじめました。

みやこちゃんは、わたしの横に棒のついたあめを三つ置いてから、お仕事に行きました。

あめは、イチゴ味と、ブドウ味と、わたしの大好きなオレンジ味でした。

わたしはブロックを組み立てながら、あめをなめながら、どうすればいいんだろうと考えました。

コトダマもつかえないわたしは、本当にただのびんぼうがみです。どう考えたって、みやこちゃんを幸せにしてあげることができません。

ブロックを組み立てると、そこにどうぶつの人形を並べて、小さなどうぶつえんを作りはじめました。シマウマ、トラ、ライオン、ゴリラ、イヌ。

人間じゃなくても、せめてどうぶつに生まれていればなあ、と思いました。

そしたらきつと、もつと。

……神さまが「どうぶつに生まれていれば」なんて考えるのは、おかしいでしょうか。

わたしはゾウとキリンの人形を持つと、それをどこに置こうかと悩みました。入口から一番ちかいばしょに置くか、それとも、シマウマのとなりに置くか。そのときでした。

体が一瞬うしろにひっぱられて、それからあったかくなりました。

「ただいまー！」

みやこちゃんの声が耳元で聞こえて、それでようやく、だきしめられたのだと気付きました。

ねえ。みやこちゃんはどうしていつも、そんなにあっただかいの？

むねにつつかえていた何か口から出そうで、けれどそれは口からではなくて、目からポロポロとこぼれてきました。わたしはみやこちゃんには気づかれないように、声を出さないように必死になって息を止めました。けれど、

「……みかん？」

心配そうな顔でわたしの顔を覗き込んだみやこちゃんは、わたしの顔を見て驚いてから、さっきよりも強く、わたしの体をだきしめました。

今

みかんは声も出さずに、涙を流し続けた。それは、声をあげて泣く子供よりも、はるかに痛々しく見えた。

私は彼女の小さな体を後ろから抱きしめたまま、私が仕事に出ている間に何があったのだろうかと考えた。いや、きっと、それよりもずっと前から。彼女の中で色んなことが溜っていて、それが今あふれ出しているんだ。

みかんの前に置かれているブロックと動物の人形は、動物園のように見えた。シマウマとライオンが向かい合っている。きっと彼女は動物園に行ったことがないんだろうなと、ぼんやり思った。

「……みゃーこちゃん」

「ん？」

「みゃーこちゃん、しゃーわせに、なれないの。……わたしと、いたら」

泣きやまないみかんがやっと口にしたのは、その一言だけだった。

しゃーわせ
幸せ。

彼女がずっと気にしていたそれは、
ずっと言い続けたそれは。

「……ねえみかん、知ってる？ お金持ちでもね、幸せだとは限ら

ないんだよ」

はつきりとした形も定義もない、曖昧なものだった。

一人で生きていこうとした今までが、幸せだったとは思えない。一匹狼を貫こうとする自分に酔っていたのかもしれないし、寂しさに気付かないように目を閉じ耳をふさいでいたのかもしれない。どちらにせよ、『寒かった』ことだけは確かだ。

「みやこちゃんね。子供のころ、いじめられてたんだ」
同級生以外、誰も知らない話。親にすら言えなかった話。私はそれを、震えているみかんの顔も見ずに言った。

暗いから。

うまく話せないから。

一緒にいても楽しくないから。

いろんなことを言われた。言われるたびに余計に暗くなって、話せなくなつて。俯いたまままで一日を過ごすようになった。猫背で、震えて。

そう、初めて出会ったあの日のみかんは、過去の私によく似ていた。

「……人と話すのが怖くなって、もうずっと一人でいいって思ってた。誰とも話さなくていいし、誰とも触れなくていい。ずっとずっと一人で生きていけば傷つくことはないんだって、幸せになれるって、思ってた」

幸せという言葉に反応して、みかんの体の震えが一瞬だけ止まった。私は彼女の右手を握る。相変わらず熱くてしっとりとしていて、そして小さかった。

「本当はね、寂しかったんだ。一人ぼっちが、怖かった」

その言葉を口にするのも初めてで、声にした途端に私の中の何かが崩れた。崩れたものは涙に変わって、頬を伝う。しばらく何も言えなくなってしまう、私はみかんの小さな肩に額を当てて、自分の震えが止まるのを待った。

二人でご飯食べたたり、遊んだり。

手をつないだり。

笑ったり。

それはとても温かくて、だから私は、

「……今、幸せだよ。すごく」

確かにお金はないけれど、それでも。誰かがそばにいてくれて。

違う、誰でもいいわけじゃないんだ。

「みかんが側にいてくれて、それだけで幸せなの。お金とかじゃないんだ。例えばすごくお天気がいい日に、『今日は青空がきれいだね』って二人で笑えたら、それだけで」

震えているのはみかんなのか、私なのか、それとも二人共なのか。

こちらを見ていない彼女に、私の笑顔が見えているかどうかは分からない。

けれど私は笑って、みかんにもちゃんと聞こえるように、出来るだけはつきりと言った。

「私は今、幸せだよ。みかん」

しゃーわせ

その日は綺麗な青空が広がっていて、私とみかんは笑いながら外に出た。

「みゃーこちゃん、今日はどこに行くの？」

オレンジ色のトレーナーを着たみかんは、自ら私の手を握ってくる。私は笑って、小さなポシエットをみかんに渡した。みかんは首をかしげてから、ポシエットの中身を覗き込む。

そこに入っているのは、みかんの拾ってきた十円玉や五円玉だった。

「これって……」

「それは、みかんのお金だから。みかんが好きなのを買えばいいんだよ。数えてみたらちょうど百円くらい貯まったから、百均に何か買いに行こうか？」

私が笑うと、みかんはポシエットを握りしめて頷いた。

てつきりおもちゃを買うのだと思っていた私は、百均に着くや否やお菓子コーナーへと走るみかんを見て眼を丸くした。確かに彼女はお菓子も好きだけど、

「……ペンギンさんのお人形が欲しいって、言ってなかった？」

真剣な表情でお菓子を選ぶみかんに私が問いかけると、みかんはこちらを見上げて笑った。

「わたしがほしいものを、かうの！」

私は苦笑して、みかんが何を選ぶのかを見守った。

彼女が選んだのは結局、いつものロリポップだった。「それなら家にまだあるよ」と私が言っても、これを買うのだとみかんは譲らない。彼女の気が済むのならそれでいいやと、私はみかんと一緒にレジに並んだ。

十円玉ばかりを渡すみかんに、おばさん店員は嫌な顔せず応じてくれた。それから、

「あら、かわいい。お子さんですか？」

そう訊かれて閉口した。確かに私の年なら、みかんくらいの子供がいてもおかしくないけれど。

「いえ、あの、なんていうか……」

「ともだちなー」

口ごもる私とは対照的に、はつきりと声を出すみかん。おばさん店員は私とみかんの顔を見比べて、けれど「あらそうなのー」と軽く受け流してくれた。

天気がよかったので、近くにある小さな公園に寄ってみる。狭いうえ、枯れた雑草だらけの整備されていない公園には、誰もいなかった。

私とみかんは煤^{すす}けたブランコに座って、空を見上げた。しばらくすると隣からガサガサと袋の鳴る音が聞こえてきて、私はみかんの方に目をやった。

みかんは先ほど買ったロリポップの袋を開けて、中に手を突っ込んでいた。

「もう食べるの？」

苦笑する私の言葉には答えず、懸命に何かを探している。何を探

しているのだろう、と思っていたら、彼女はようやく探し当てたそれを、私の眼前に突き出した。

それは、みかんの大好きな、オレンジ味のロリポップだった。

「あげる」

「え？」

「あげる」

「……ありがとう」

彼女が手を引っこめようとしないので、私はそれを受け取った。

みかんは笑って、

「わたしが自分で買ったものだから、いちばんすきな味^のを、いちばんすきなひとに、あげるの」

そう言つと、勢いよくブランコをこぎ始めた。その顔はわずかに紅潮していて、私は眼を細める。

「……みゃーこちゃんは、しゃーわせに、なったの」

私は呟くようにそう言つと、オレンジ色の飴をポケットにしまつてから、みかんのリズムに合わせてるようにブランコをこぎ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6721x/>

貧乏神はオレンジ色

2011年10月26日12時04分発行